

東京タワー オカンとボクと、時々、オトン

2007(平成19)年4月15日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



監督=松岡錠司/原作=リリー・フランキー『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』(扶桑社刊)/出演=オダギリジョー/樹木希林/内田也哉子/松たか子/小林薫/伊藤歩/勝地涼/平山広行/猫背椿(松竹配給/2007年日本映画/142分)

……リリー・フランキーの210万部を超える大ベストセラー小説の映画化だが、オカン役における母娘共演は大成功! 炭鉱のまち筑豊から上京してきた青年は、五木寛之の『青春の門』における伊吹信介ほどのしっかり者ではなく、いい加減な男だが、それでも今やオカンを東京に呼び寄せるまでに急成長……。そんなオカンとボクの幸せな生活が長く続かなかったのは、オカンの病気のせい。映画の後半展開されるガンとの壮絶な闘いと、それを見守るボクとの物語がなぜ多くの観客の涙を誘うのだろうか……。地に足をつけて、それをじっくりと考えてみたいものだが……。

「ボク」はリリー・フランキー……?

この映画の原作を私は読んでいないが、210万部を超えるロングベストセラーの同名小説。2005年6月に出版されるや「泣ける」「号泣した」という評判を呼んだこの小説は、リリー・フランキーが自分の亡き母親への想いをテーマとして書いたもので、幼少時代、中・高生時代、大学時代、そして大学卒業後イラスト・エッセイ・コラムなどを書き、「成功者」となった彼自身の自伝小説。

主人公伊吹信介の波瀾万丈の人生を描いた五木寛之の大作『青春の門』と同じく、彼の出身地は福岡県の炭鉱町、筑豊だが、彼のこの小説の大きな特徴は、その面白いタイトルどおり、主人公に名前がなく、その両親にも名前がないこと……。オカン、オトンという表現は東京では全然使われていないはずだから、本のタイトルとしては必ずしも有効ではないと思われるが、あえてそれに挑んだの

が大成功だったようだ。しかして、ボクは不特定多数の1人として描かれたため、理論上こんなボク、あんなボクが無数にイメージできることになり、とりわけ若い男性諸君は、このボクに自分を同化させることができたのでは……？

パンフレットには、原作者リリー・フランキーのインタビュー記事があるが、そこで面白いのは「ボクは、リリー・フランキー自身がモデルか？」というやたら多い質問に対するリリー・フランキーとオダギリジョーの回答。それは、この小説や映画の主人公はあくまで創造された1人の男であるということ。したがって、この物語はオダギリジョー自身の話であり、観客ひとりひとりの話でもあるということなのだ。最近のマスコミからの質問は、当たり前の意味のない質問や、的外れでトンチンカンな質問が多いから、要注意……？

本格的な母娘共演に拍手！

『愛ルケ』こと『愛の流刑地』（06年）では、寺島しのぶと富司純子の母娘共演が話題となったが、そのシーンのごくわずかだった。しかし本作では、若い頃のオカン内田也哉子と現在のオカン樹木希林が入れ替わり立ち替わり、ほぼ対等の量で登場してくるから、まさに本格的な母娘共演。

樹木希林は超演技派のベテラン女優だが、内田也哉子は何とこの映画が初出演とのこと。すばらしいというか厚かましいというか、その決断は大したものだが、さすがカエルの子はカエル、そして芸能人一家……？ 父、内田裕也、母、樹木希林の娘として生まれ、俳優の本木雅弘と結婚し、現在2児の母として子育てをしながら、文筆活動や音楽活動を行っているという才女らしく、若い頃のオカンの役を見事にこなしているのは立派で、本格的な母娘共演に拍手！ ちなみに、その味付けは実の母親そっくりだから、美人でない女優もやはり貴重……？

ちょっとモテすぎでは……？

ボクがミズエ（松たか子）にはじめて会ったのは、ボクのヘンな友人の1人平栗（勝地涼）がはじめて自分で持った小さなスナックのカウンター。お金をケチるため2人で住んだアパートも家賃が払えず、大学も卒業できないままサラ金の借金ばかりが増えていた最悪の時代を何とか切り抜け、2人ともやっと東京で生

きていく道を見つけた頃のことだった。この映画は、ボクとオカンの物語をメインに据えているから、ボクとミズエとの恋物語は詳しく紹介しないが、なぜこんな美人で気立てのいいお嬢さん(?)が、フリーターに毛が生えた程度の、海のものと山のものともわからないボクと順調に愛を育むことができたのか、と思ったのは私だけ……? だって大学時代、アパートに彼女(竹下玲奈)を連れ込んでコトに励んでいるボクのダラしない生活を見ていると、急にこんなに真面目になれないのではと思うから……? そういう意味では、ボクはちょっとモテすぎで、これはリリー・フランキーの実体験とは大いに異なるのでは……?

さらにわからない、ボクの女性観……?

東京にやってきたオカンが、ボクの友人たちと仲良くなれたのは、オカンの人柄もあるが、それ以上にオカンのつくるメシがおいしいという現実的メリットによるもの……? 母と息子の2人暮らしなのに、毎日お米を5合炊いていたというからそりゃ異常……? ミズエはそんなオカンから気に入られ、いつか3人で東京タワーを見に行こうと約束しているほどの仲なのに、なぜかボクとミズエは別れたらしい。しかし観客にはその理由は全くわからないうえ、別れた後もミズエはボクとオカンとの物語の節目、節目に顔を出し重要な役を演じているから、その存在感は変わらない。したがって、やはりそこらあたりの説明責任は果たしてもらいたいもの……? 他方、ボクが出演しているラジオ番組でお世話になっている女性タマミ(伊藤歩)ともボクはかなり親しくなっているようで、オカンのお通夜の晩の様子を見ていると、まるで新しい彼女のように……? こりゃ一体どうなっているの……? ボクとオカンの関係は実によくわかるのだが、ボクの女性観はよくわからないというのが、私の実感……?

オカンとオトンの関係もかなり特殊……?

オカンがボクを連れて筑豊のおばあちゃん(渡辺美佐子)が住む実家に戻ったのは、ボクが3歳の頃。そして、ボクが30歳代になり、オカンと死に別れる時には、オトン(小林薫)も東京の病院やボクの家に来ていたのだから、入籍したまま別居状態というオトンとオカンの関係は30年以上続いたかなり特殊な関係。ボ

クが小さい頃、オカンはハイカラな男（寺島進）とデートしていたから、ひょっとしてその男との再婚とそのためのオトンとの正式の離婚もありえた話だが、なぜオカンはその道を選ばなかったのだろうか……？ 他方、「これほど自由に生きている男を見たことがない」とボクから評されるほどの自由人であるオトンも、オカんと別居生活後、ソープ嬢をはじめとして（？）何人もの女と出会ったはず……。それなのに、なぜオトンはそんな女と再婚しなかったの……？ そんな疑問も、この映画を観ながらじっくりと考えてもらいたいもの。

ここでもガン告知のあり方は……？

3月29日に観た『眉山』（07年）で、医師の説明義務の一環としてガン告知のあり方についてコメントしたため、この映画でもオカンの甲状腺ガン（喉頭ガン？）の告知のあり方について、若干のコメントを……。

ボクがオカンのガンを知ったのは、やっとボクがイラストやコラムの仕事で食っていけるメドが見ついた頃で、それもブーブおばさん（猫背椿）からの電話によって。医師はオカン本人に対してガン告知をしたうえで手術をし、一応成功したらしいから、それはそれでいいのだが、難しいのは、今東京タワーの見える病院に入院しているオカンの残ったガン細胞にどう対処していくのかという問題。もちろん、しばらくは投薬で抑えていくのだが、いつまた再手術が必要なのか？ その成功の確率は？ 手術に耐えられない場合の治療法は？ など主治医（田中哲司）と患者本人との間で、情報の共有と意思疎通が必要なことは山ほどあるはず……。オカンの場合、結局再手術はムリ、そして苦痛を伴う抗ガン剤治療に臨むということになったのだが、映画で観る限りこのインフォームド・コンセントは主治医とボクの2人でやっており、オカンは全然立ち会っていない。もちろん、オカンがボクにすべてを任せているのだから、それで問題はないのかもしれないが、医師としてはやはり第一順位の説明対象者である患者本人に説明し、治療についての自己決定権の発動を促すのが筋なのでは……？

ガンと闘う姿は壮絶そのもの……

そんな法的な論点はともかく、この映画後半でみせるオカンが抗ガン剤治療で

苦しむ姿は、樹木希林の演技力もあって壮絶そのもの。一口に「ガンと闘う」と言うものの、抗ガン剤治療による吐き気や痛みなどがこれほどひどいのなら、誰だって「もうやめようよ」と思うのは当然……。そして、そんな苦しみを経てたどり着いたオカンとボクの結論は、やはり「もう十分だろう」ということ。そこで、ボクが主治医に対して抗ガン剤治療の中止を申し出たのだが、それに対する主治医の反応は……。？ 私は、これにもちょっと納得できないのだが……。？

ワンシーンだけの出演料は……。？

アルフレッド・ヒッチコック監督は「カメオ出演」を好んだそうで、たくさんの作品にカメオ出演しているが、この映画にはアッと驚く俳優たちが、ワンシーンだけながら数多く出演している。なぜそんなちょっとした端役にそんな有名俳優を、と思うのだが、これはもちろん松岡錠司監督が意識してやったもの。少し紹介すると、それは①ラジオ局のディレクターの仲村トオル、②アイドルDJの宮崎あおい、③不動産屋の事務員の小泉今日子、④笹塚の診療所の医者 of 柄本明、⑤中目黒の大家の松田美由紀等々。

この映画自体は、そのほとんどがタイトルどおり「ボクとオカンと、時々、オトン」の出演者で構成されているから、彼ら彼女らの出演はホントにワンシーンだけだが、果たしてそんなワンシーンだけの出演料は How Much……。？

東京タワーの展望台は……。？

ボクも東京生活が十数年になりながら、まだ1度も東京タワーの展望台に上ったことがないらしい。ということは、オカンとミズエの3人で交わした約束もまだ実行していないということ……。東京に住み日々の生活に追われている人間にとっては、そんなものだろう。誰かさんとのデートスポットとして利用したり、逆に東京見物ツアーに参加する場合などでなければ、わざわざ真昼間から東京タワーの展望台に上ってみようと思わないのは、仕方なし……。

実はこの私も、今から約35年前の司法修習生時代の前期4カ月、後期4カ月も、また弁護士になってからの東京出張時においても、1度も東京タワーの展望台に上ったことはなかった。私のはじめて展望台に上ったのは、昨年12月23日の天皇

誕生日に、「はとバス」による約8時間コースの東京見物をした時。この時は展望台は見物客でいっぱいだったが、遅まきながら約束を果たすべくオカンの位牌を持ったボクが、ミズエと一緒に展望台に上った時はガラガラ状態。これはひょっとして撮影のために入場制限をしたのかもしれないが、東京タワーの展望台から見る東京の景色は最高だから、オカンもきっと満足していたことだろう。

泣かせる仕掛けはあちこちに……

小説の反響はそのほとんどが「泣けた」「号泣した」というものだが、この映画でもその基調は全く同じ。したがって、オカンの病状が次第に悪化していく中、ボクが懸命に看病するシーンや、オカンが「私が死んだら開けなさい」と言い残した箱をボクが開けるシーンなど、松岡監督はいくつかのシーンで観客を泣かせるための仕掛けをしっかりとつくっている。

観客はどちらかというと年配者が多いため、そんなシーンを観るとわが身につまされるようで、あちこちの席から次第にすすり泣きの声が……。原作の小説が大ヒットしたのは、家族の絆、親と子の絆が次第に失われている現代社会の中で描かれた素朴で純粋な「オカンとボクと、時々、オトン」の姿に、「ないものねだり」的に感動したため……。もっとも、最近とみに涙もろくなっている私は、この映画では泣くことはなかったが、さてそれは一体なぜ……？

2001年4月1日は……？

この映画のラスト近くで印象に残ったのは、桜が咲く4月1日に東京で降った雪。病室の窓から見える東京タワーに、ちらちらと小雪が舞う姿はそりゃ美しいもの。

これは現実の話で、2001年4月1日の出来事だ。ちなみに、この年の4月26日には小泉内閣が発足し、以降5年5カ月にわたる小泉改革が始まったのだから、その意味でも2001年4月は日本国にとってエポックメイキングな月。そんな月のはじめに、桜が咲く中で小雪が降ったのも、その後のオカンの死亡や日本国の激変について暗示していたのかも……？

2007(平成19)年4月16日記